報　告

言語の指導を中心とした国語教育

―― 言語教育からみた生徒の理解力・表現力の育成について ――

河原塚　　努

1　はじめに

新しい学力観に立った新学習指導要領には、生徒一人ひとりの個性に応じた教育の推進とともに、基礎・基本の重視が掲げられている。この基礎・基本は、生涯学び続け、社会の変化に主体的に対応していく資質や能力を育成する上で、根幹をなすべきものであり、極めて重要な事柄である。

国語における基礎的・基本的能力とは、言葉を的確に理解し、適切に表現する力である。そして、それらは、言葉を正確にとらえ、言葉のきまりや表現の型を意識させることによって育成される。言葉にはどんなきまりや性質があり、それらがどのように効果的に活用されているか、また、効果的表現にはどのような類型が見られるかなどを、個々の言葉や表現に即し、生徒に気づかせ、意識させていくのである。

このような指導は、他の作品鑑賞にも応用できるばかりでなく、生徒個々の言語感覚を磨き、自らの力で鑑賞し、表現する能力の育成にも資すると考える。

ここでは、主に「が」と「は」との働きに注目しながら、現代日本語文法を用いた鑑賞並びに表現指導について言及する。

2　「が」と「は」の文法的働き

A：私は山田です。　　B：私が山田です。

Aの文は、私がだれであるかについて述べたものである。「山田です」が新しい情報であり、そこに表現の重点がある。一般に「は」は、文末と呼応し、文を完成させる機能を持つとともに、ある事柄をとりたてる働きを有する。そのため、「は」を用いた文は「～については（主題）～だ（説明）」という文構成になり、情報伝達の観点から言えば、「既知」は「未知」という内容になる。

一方、Bの文は、だれが山田であるかについて述べたものである。「私が」の部分が新しく伝えられた事柄で、そこに表現の重点がある。「が」は、主格成分となり、不完全な意味内容の述語に対して、新しく意味を補充する機能を持つ。そのため、情報伝達の観点から言うと、「未知」が「未知」、「未知」が「既知」という内容となる。

こうした言葉のもつ働きを、鑑賞指導・表現指導に生かしていこうと考える。

3　現代日本語文法を用いた鑑賞指導

(1)　小説・随筆の鑑賞指導

「が」を用いた文は、述語が主格の動作、存在、一時的な状態を表す時、「未知」が「未知」の文になり、文全体が新しい情報となる。情景を一つひとつ描写する文章になるのである。

遠景に雪の山々があり、手前には辛夷が咲き、落葉松があわあわとした緑を見せている。赤茶色のひろがりは、楓や楢の新芽だろう。その赤茶色の炎の中に紅山桜が点在している。私は立ちつくした。立ちつくしているうちに露草色の空が見えてきた。風の中のしぶきが光っている。(『紅山桜』、辰濃和男、「国語Ⅰ」)

このように、「が」の多い文章は、筆者の目に映る景色を新情報として、今まさに見えたものとして、表現する文章になる。すなわち、この種の文章には、読み手に新鮮な印象を与え、筆者の発見を生き生きと伝える効果がある。生徒には、この「が」の言葉の働きを意識させ、この臨場感を味わわせることが可能である。

一方、「は」を用いた文は、「主題」は「説明」という文構成になるため、解説的な文章になることが多い。文章全体を語り手が解説する型となり、登場人物の行動や心理を解説する文章に多く見られる。

下人は、何をおいてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして――いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路に降る雨の音を聞くともなく聞いていたのである。(『羅生門』、芥川龍之介、「国語Ⅰ」)

『羅生門』の語り手は、「下人」の外にいながら、「下人」の心中に入り込み、行動や心理を説明する。こうした作品は、登場人物の行動や心理を眼目として読み深める指導が必要である。

また、「は」を用いた文は、冒頭にくると、読み手を強引に作品世界に引き込む効果を持つ。

喬は、彼の部屋の窓から寝静まった通りに凝視(みい)っていた。(『ある心の風景』、梶井基次郎)

本来、冒頭には、「が」を用い、登場人物を未知の存在として紹介し書き始める。ところが、このように、読み手に対して「喬」を既知の存在として表現し、読み手をいきなり作品世界に引き込むのである。こういう計算された効果的表現も、「は」の働きを理解させることによって、気づかせることができる。

古典の作品では、詳しくは述べないが、『枕草子』が「は」の効果的な鑑賞指導の可能な教材であると考えられる。

(2)　和歌の鑑賞指導

既知の情報を前提として、新しい情報を表現する場合、それが聞き手だけでなく、話し手自身にとっても新しい情報である場合、その和歌は発見の歌になる。発見の歌は、

「既知」は「未知」、「未知」が「既知」の二種類が考えられるが、実際の和歌を見てみると、その多くは、C：「既知」は「未知」なりけり、D：「未知」ぞ「既知」なりける、となっている。

C：山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり（『古今集』、秋下、春道列樹）

D：見渡せば柳桜をこぎまぜて都ぞ春の錦なりける（『古今集』、春上、素性法師）

Cの歌は、人間がかける「しがらみ」に対して、風のかけた「しがらみ」は何だろうかと思っていたところ、「それは、流れきらず残った紅葉だった」という発見を詠んだものである。「なりけり」の「けり」は、いわゆる「気づきのけり」で作者の発見の感動を表している。それに対して、Dの歌は、秋の錦は紅葉で有名だが、春の錦はないものだろうか、という疑問が先にあり、「柳の新緑と桜の花の色とを織りまぜた都こそが春の錦だった」と気づいた歌である。双方の歌とも、新しい発見に感動の焦点がある。生徒には、「なりけり」の「けり」の働きを糸口にして、作者はどんなことに気づいたのか、感動の焦点はどこかを質問し、和歌の型に気づかせ、理解を深めさせることが大切であると考える。

(3) 俳句の鑑賞指導

E：桐一葉日当たりながら落ちにけり（高浜虚子）
　　くろがねの秋の風鈴なりにけり（飯田蛇笏）

F：冬の水一枝の影も欺かず（中村草田男）
　　しゃぼん玉底にも小さき太陽持つ（篠原　梵）

Eの句は、「が」を補い、「桐一葉が」、「秋の風鈴が」という意味になり、Fの句は、「は」を補い、「冬の水というものは」、「しゃぼん玉というものは」という意味になると思われる。したがって、Eの句は、「未知」が「未知」の描写の句であり、描写された景物が生き生きと直接的に読み手に伝わってくるという効果を持った句であると考えられる。虚子の句も、桐一葉が秋の日に光りながら、ゆっくりと舞い落ちてゆく様子を的確にとらえ、秋の趣をよく伝えた句といえる。また、Eの句では、句末に「けり」が用いられ、その景に対する作者の感動が表現されている。この種の句には、必ず「嘆辞」が用いられるといわれるが、これらの句は、生き生きとした描写とそれに伴う作者の感動を読み手に追体験させる効果を持つと考えられる。こうした表現効果を、言葉の働きより気づかせ、鑑賞させていかねばならない。

それに対し、Fの句は、「既知」は「未知」という、主題に対する発見の句である。冬の水はどうかというと、鏡のように静かで、冬木の細かい枝一本一本までもはっきりと映し出しているのだというのである。冬の水の特性を新たに見い出し、それを「一枝の影も欺かず」という事実に語らせることによって、発見の感動を強めている。この種の句は、発見の部分に焦点があり、そこを十分に鑑賞させていく必要がある。

このように、言葉の持つ働きに注目させ、表現の型を気づかせていくことで、生徒の読みは深まり、他の作品への応用も図られていくと思われる。

4　現代日本語文法を用いた表現指導

日本語の文は、多くの場合、あることについて（主部）、それがどうであるか（述部）を述べる構成となっている。その主部と述部との係り具合が悪いと、いわゆる文のねじれ現象が起こったり、意味が曖昧になったりする。さらに、文法的におかしな文は、読み手に混乱を与えることにもなる。ここでは、「は」と「が」の文法的な働きを生徒に意識させることによって、表現をより適切にしてゆく指導について述べることにする。

(1)　主部・述部の呼応について

主題を表す「は」は、ある事柄をとりたてる働きを有する。したがって、とりたてられる事柄は、主格（～が）に限らず、位格（～に）、対格（～を）など多様であり、しかも、直接他の格と関係を持たない。そこで起きやすいのが、主部・述部のねじれ現象である。「人間の生き方を決定するものは、その人の生まれ育った環境によって違うものだ。」などがその例で、主部と述部とがうまく呼応していない。このようなねじれ現象を防ぐ指導としては、次のようなことが考えられる。

①　一つの文で、一つの事柄だけを述べるようにし、主部と述部とを離さない。

②　主題の「は」は格関係を示さないので、「～には」、「～では」などと格助詞を明示して表現する。

③　主部が「～のは」の場合、「の」に置き換えられた体言を想定し、述部と呼応させる。

④　推敲時、主部と述部とを取り出し呼応関係を確認する。

以上のことを意識させ、注意させることにより、ねじれ現象はかなり防げると考えられる。

(2)　接続語を内在する文について

A：太郎は演奏を始めると、必ず眠くなる。

B：太郎が演奏を始めると、必ず眠くなる。

Aの文で「眠くなる」のは、演奏をする「太郎」であるが、Bの文で「眠くなる」のは、「太郎」の演奏を聞く人である。このように、「が」、「は」によって、文意が変わるので注意させる必要がある。

この文意の変化は、「が」と「は」および接続助詞「～と」の文法的働きによる。接続助詞「～と」によってまとめられた接続語は、主格（～が）は包含できるが、主題（～は）は包含できない。そのため、Aの文では、「太郎は」は接続語の外にあって、接続語を飛び越え、「眠くなる」にまでかかっていくことができるが、Bの文の「太郎が」は接続語内にあり、「始める」にしか係らないのである。Bの文では、接続語「太郎が演奏を始めると」の次に「～は」を補い、だれが「眠くなる」のかを明らかにすべきである。

なお、接続助詞「～と」と同じ働きを持つ接続助詞としては、「～ば」、「～たら」、「～なら」、「～ので」がある。一つのグループとして、まとめて指導したい。

(3)　連体修飾語を内在する文について

今この下人が、永年、使われてきた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の余波にほかならない。

（『羅生門』、芥川龍之介、「国語Ⅰ」）

「下人は」と語られる文の続く中、唯一例外的な使われ方である。これは、「は」には従属句中の主語を表す働きがないからである。一方、「が」には従属中の述語と関係して連体修飾語をつくる働きがある。「～が～することは」、「～が～するのを」という表現ができるのである。こうしたことを、授業でとりたてて指導し、表現の学習に役立たせていく必要がある。

5　おわりに

文法は、理解や表現に役立つものでなくてはならない。そのためには、言葉の持つ働きや性質を、言葉や表現に即して教え、文法が表現内容といかに密接に結びついているかを、気づかせていくことが重要である。

本報告書も、このような観点からのものであり、ささやかな実践である。

引用文献

北原　保雄　『日本語助動詞の研究』（大修館）
同　上　『日本語の文法』（中央公論社）
同　上　『日本語文法の焦点』（教育出版）
佐伯　梅友　「『は』と『ぞ』」（「言語と文芸」第81号）
南　不二男　『現代日本語の構造』（大修館）
大野　晋　『日本語の文法を考える』（岩波書店）
「国語Ⅰ」（大修館）

付記

この稿は、平成５年度埼玉県長期研修教員として、筑波大学で研修した際、まとめたものの一部である。研修時、桑原博史先生を始め、多くの先生から御指導を賜りました。記して、謝意を表します。

（埼玉県立大宮光陵高等学校教諭）